

線 岸 海

1

島	三	猪	大	雄	北	石	三
田	野	狩	浦	野	山	川	野
春	混	満	弘		癌	武	混
夫	沌	直	四	勇	藏	夫	沌

十八歳の僕と低気圧 (詩)

工場から畑へ・防風林 (詩)

仲間と俺達は戦つてゐる (詩)

(詩)

○ (詩)

久しぶり (詩)

蒼空 (詩)

描寫上の問題と勞働せる作家や詩人
(評論)



新刊圖書雜誌

THE STORE OF
TO-DAY AND TO-MORROW

平町公園前 (角忠) 佐々木商店

電二三三番

NAKANO YOHINGEN

電 5 3 番 平町二丁目

皇紀二千五百九十一年
を祝福します

賛

設樂繁夫

宴會の御歸りに……

淺酌底唱……シンミ

リした御氣分を

味ふ方々の爲に

座敷は待つて

居ります

楽 壽

町田新町平線岸海

電五百九番

本誌執筆著書紹介

高瀬勝男 詩集『赤の斑點』第一
昭和二年二月 路傍詩社刊 價二〇錢
三野混沌 詩集『百姓』昭和二年三月
土社刊 價二〇錢
同 詩集『開墾者』昭和二年四月
ドラ社刊 價二〇錢
草野心平 詩集『第百階級』昭和三年十
一月 ドラ社刊 價一圓
猪狩満直 詩集『移住』昭和四年八月
ドラ社刊 價七〇錢
雄野勇 詩集『顔と樹』昭和四年十月
北方詩社刊 價五〇錢
高瀬勝男 詩集『赤の斑點』第二
昭和五年四月 ラッパ社刊 價二〇錢

雜記帳

今朝水がはつてた
午後になつて日がてつてゐるのに雪がふ
つた
わが一家にとつてこの冬は峠 ただ、
つらぬくのみ

一人、二人、仲間ばふえてく。
少しづつ、動いてゆく。(草野心平)

消 息

昨年晩秋 草野心平氏歸郷
昨年十二月三十日 三野混沌氏の二女梨
花子さん亡くなる 一歳
同十二月三十日 猪狩満直氏の北海道
より歸國
同十二月三十日 島田春大氏上京當分在京

雪解けの記

この雑誌は島田春夫君が一切をやる筈で
またあらまし出版するまでになつて印刷
所へ廻つてゐたのだが、突然島田君が上
京してしまつたので代りに私が編輯その
他を引き受けることにした。なので、編
輯も島田君のしたものと幾分か變つたし
廣告の具合もこんな風になつてしまつた
のは島田君に氣の毒で、よく同君に話を
して了解を得る筈に思つてゐる。若し島田
君が歸つてくればいつでも私は一切を君
におまかせする筈でゐます。
今月は松村氏、その他の執筆がなかつた
それから高瀬君の詩 未稿なのは島田君

が無理に買つてきたので、頁数の都合で
(このことはほんとに氣の毒なのです)
止めた。來號を期してまた。
何分資金が足りなくて、うすつべらなも
のしか出来ないのは仕方ないようです
だん／＼充實(色々な方)にさせたい考
へです。

この雑誌は別にたままつた主義主張もな
く皆んながよつてたかつて色々書いて一
冊にすると言ふようなものになります。
發刊が後れたことは皆さんと廣告主の方
々にすまないと思つてゐます。
珍らしく二寸餘積つて夜が明けた雪の午
前の陽光の中でこれを書きました(石川)

昭和六年一月十日印刷發行

編輯・發行者 (發行所)

石川武夫

印刷者

熊次郎

發行所

海線社

石川

平町古鍛冶町十三

海線社

石川

平町古鍛冶町十三

海線社

十八歳の僕と低氣壓

低氣壓は實にいやな奴だ
低氣壓は實にいやな奴だ
と仲間のみんなはいつた

低氣壓は職工長で、犬のやうに嗅ぎ分ける敏感な鼻と、會社の役人達に無條件でベコベコ下げる大きな才地頭を有つてゐた

怒鳴る時、低氣壓はボイラーの排氣管のやうであつた

僕は毎日、爆發するボイラーを身體いつばいに感じながら働いた
そうして二ヶ月の冬を怒鳴られ通した

僕が餓にされた時

みんな低氣壓のためなんだといつて親しい仲間は泣いてくれた

僕はなんにも云へなかつた

僕は十八で

日給三十八錢の見習工だつた

(島田春夫)

工場から畑へ

労働者諸君

工場からすぐ畑へ飛び込んで

そして一目散に好きな物をとつて食べるがいい
これはいいこつた

諸君がいつてくれたことと僕がかうして畑で待つことがよく一致させてくれた

「金のことはあるときはあつても

ないときはないといつて食べねえわけにいかねえから」

畑は諸君の畑だ

僕は作ることを次々とやつてゐる——そして僕にはかまはない

諸君のすべての注意を作物と畑の爲につくしてくれるだらう

もとより消費の大事なことを知り、それを基として
このことを諸君に聞かしたらびつくりするか

否、諸君も僕も聞いてもびつくりはすまい

ただもうどん／＼とやつてゐるがいい

(三) 野・混・沌

防 風 林

穀物畑は穀物を刈り穫られて灰色に
人々は頼りない共同に疲れてゐるが
さて何か待ちあぐんでゐるやうに穀物の側に立ち上る

やがてさら／＼と北風が防風林をくしけづつて吹いてきた
穀物はめいめいの庭に乾し擡げられ始めた
うづたかく積んだしだれ重い穀物

この穀物の値の安いとて食ふ物のない者の悲哀を打ち越えるだらうか
彼等は賣ることを止めないだらう
彼等は働くことを止めないだらう
彼等は賣ることを止めるだらう
彼等は働くことを止めるだらう

(三 野 混 沌)

仲間よ俺達は戦つてゐる

——〔詩集移住民より〕——

稻黍飯くつてゐると
ネチネチ腹わたがねつかまりそうだ
塩もない
赤貧乏

その上 病氣ときやがる
俺達の頸をつるしたがつてゐる木なるいくらでもあるさ
だがそんな木を切り倒しては焚木にしてゐる俺達だ
どんなときでも 仲間よ

俺達は俺達の睡のやうな子供のあることを忘れはしないんだ
どんなときでも 仲間よ

俺達は新しい地を繼ぐ子供のあることを忘れはしないんだ
飢餓

吹雪

仲間よ 俺達は戦つてゐる

(猪 狩 満 直)

詩

(落 穂 高 直)

大きな雲は

散らばつて

消えて

空！

空がひろごつて

さむざむと

空がひろごつて

(大 浦 弘 四 郎)

昔聞かぬ道に迷ひてゐる

——(結果詩集列10)——



云ふことは何も無いのです

お互にすべて判つてゐるのです

誰にでも全く判つてゐることです

ぼろぼろ汚い幹の櫻が

あゝ

あのすばらしい花をつけてゐるのです

不必要なこと

結局必要なのです

——(舊 作)——

(雄 野 勇)

人 じ ん

久しぶり

8

ほう ほう つておれはうはの空の返事をしながら、草鞋をこいてるフシコブの指を見ながら
(久しぶりだナ) おれは心の中でドキドキする

一里の坂をあがつて十文字のテツベン、四十里の遙か那須火山脈がみえ、モミ林、ゴボンサを過ぎ、
内倉、横川、その四五軒の部落と岩魚の絶端、狐のゐる萱山、すすき山、あすこの松林を膝巻きに
した高原に出れば、遠く太平洋の青ガラス、それから花巖石、オガツ屑、だんだん畑、それから……
頭の中のバノラマなんかどうでもいい
イヤ しばらくだなあ

まあ あがんなといふことになり

よくあることだが話がなく

お茶をつぎつぎフンなんて笑つたり、いあおばちゃん酒もつてくるつちからといへば
なにいい なにいい (なにいい) なんてあるもんかと心の中では思つてゐるのだらう (おれはち
やんと知つてるのだ)

ボンと叩けばボンと音するな豆ギセル

おおいといへばはあーいと返事する臺所
格子戸から舞ひ込んだ何んだかのはつば
酒は酒

肴は岩魚

友はとも

經濟や歴史やバニツクや世界情勢のABC

おれらはもうすつかり昔のおれらをとりのどし更にあたらしいおれらとなつた
これ見ろと熊の毛の生えた筋骨リユウリユウたる右腕をはいで見せるぢやないか
磐城なまりをカツとばし乍ら、もつたいないとお膳にこぼれた山吹色をすりながら
しかし乍ら心の中ではじーんとした静かな覺悟でお互ひの腹をすりつけながら
おばんちゃんにあいそを言ふおどけたこの男の不精ヒゲをギツとみつめて
眼がしらのあつくなるおれを「なんだえ」とおれをわらつたものだ

(北 山 癌 藏)

蒼 空

10

この蒼空はどうだ！
際限もなく漂渺として——
千切れ千切れの白雲が飛んで行く
寝ころんで見てゐれば
私の心も身體をはなれて
あの千切れ雲のように
雲といつしよに
この蒼空を飛んで行く——

(石 川 武 夫)

描寫上の問題と勞働せる作家や詩人

晩秋、三頭の象をひきつれた曲馬團が平町へやつてきた、後一日ある日、久しぶりで草野君が訪ねてきた、個人の話や文藝上の話やらにうつつた。

同じ詩であつても、數字、又は一行二行と無駄な形容や説明をなしてゐるかと思へば、一字二字がなくてほんとにも全體が成立たないといふ程の詩、例へば宮澤賢治がある（僕等は爐端を捨て、障子を開け、椽側に腰をかけた）賢治氏の場合、何かがあんと暗くされるとその後に實に明るいとしてああいふ風に立つてゐる樹の影——西陽におびただしく樹の影がいくくんどうつてゐた——があり／＼と現はされる。

普通の人なら、これを見た場合、單に美しいとかいふ時、氏は然ういひやしないし、見やしない、これが氏の詩人であるわけになる。

序に、氏の詩を書いた背景について、もう少し考へると實にスケールが大きい、實際廣く關係してゐる坊間と岩手風物、その必然的レフレクションが氏を通して行はれたのである。

共産村を営み、村の百姓仲間と芝居をやり、音楽をやり、書いたりしてゐるといふ。著書「春と修羅」は、最初讀んだ時不思議な世界が感ぜられるがはつきりとその詩の全體を解せない、一寸面くらつたとよくいふ。僕も教養ある農業技師のやうな人が、村を經營して、それがまたすぐれた詩人でもあつたかなとか考へてみた。

立派な地質學者であり、然うかと思ふと親切に手をとつて教へるやうに木の植ゑ方を教へる技師、否、毎日皆と一つに働いてゐる百姓だといふことが、おぼろげながらも解つた。僕達の話は、詩人であるよりまづパンのために働くのが正しい、そして詩人とか作家とかいふ職業は持たないで、詩人で

作家で労働者であつたり出来るといふこの方が正しいといふにあつた。然らば描寫上の問題と労働せる作家や詩人との關係がどう結ばれてゐるかを、こんどは二三の例をあげて大體話してみたい。

今夏、H村の青年達によつて組織された青物夜店がT町街上に突然現はれた。僕はH村の生れである。時々行つてゐるから、彼等の動いてゐる情態をよく解つてゐた。第一夜は青年二人であつた。彼等が夕刻街上に現はれると消費側である町民は早くも籠や箆を携へて一散に待ち構へてゐた。農會側の人々が人垣の影に苦笑し消える間に、生産者から直接消費者へは實行された。青年達は夜中歡喜にみたされて眠れない程であつた、仲間は日に日に増した。出發は共同であつた、生産販賣と消費との共感だ。兩者間無駄がないやうにせられた、然うでないとはバンを得ること、もしくは挽回することが出来ないからである。

この共同の作業から起つた感動が美意識となり、従つて自然の飛躍であり、これが文藝の表識となる時、適切に、簡潔に描寫されるのである。熊公や八公にまで電氣のやうに感じなければならぬやうに寫實されるのである。

次にこんな例があつた。

「O府N郡A農事實行組合では組合員相互の交換市場で、組合員は自家生産品を適當に按排して誰もが青物行商人に轉することゝ夕刻の市場で品物を整へ翌朝五時頃から手車を挽いてO市へ三百に近い組合員が銘々に行商する。」

「K郡では組合が共同で米を精白にし、白米の小賣行商を始めてゐる。」

農産物卸値が生産費に比し安いのでいづれも仲買人を排する企が行はれてきたのである。

かうして現在、生産物價額が市場を中心にして行はれてゐるとは言へ彼等が相互に交換する物の價値はその交換市場で定めることが出来る。これ等の諸組合はもとより戰闘的プロレタリア組合に屬し

てゐるものではない、返つてブルジョア統治機關の指導を直接間接に受けてゐる。このプチブル組合の中に、しかも自治自働組織をつくつて行かうとする傾向がいちじるしく進んでゐる。今日僕はこれらの組合の活動せる指導理論を論ずる紙面を貰ふことを許されてゐない、ただ「どうすれば僕等の目的は達せられるか」バンと自由とを得ることが出来るか、そのために何を爲し、何を感じたか、更に何うしやうとしてゐるかの現實に立脚して文化社會が打ちたてられるだらう

そして各地の組合の活動文法が綜合し聯結され資本主義生産關係の悪い桎梏を斷ち生産及消費の公平無私な均等を得やうと努力するやうになつた事、同時にこれ等の綜合組合機關の活動の上に發生した新しい社會觀を土臺として、實際にたづさはり働ける自由獲得の作家或は詩人達によつて起された文藝が新しい倫理や藝術を生みつけるであらうことを期して話を止めておかう。

河田鐵工場

平・白銀町
電話 三三九番

9

マルトモ書店

あなた方の

電二三四番

二葉印刷所

平・仲町
電一九三番